

氏名(本籍)	上岡克彦(岐阜県)			
学位の種類	博士(医学)			
学位記番号	博乙第712号			
学位授与年月日	平成3年9月30日			
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
審査研究科	医学研究科			
学位論文題目	先天性気管狭窄症に対する外科治療——実験的検討—— (Dissertation形式)			
主査	筑波大学教授	医学博士	草刈	潤
副査	筑波大学教授	医学博士	大野	忠雄
副査	筑波大学教授	医学博士	小形	岳三郎
副査	筑波大学教授	医学博士	長谷川	鎮雄
副査	筑波大学教授	医学博士	林	浩一郎

論文の要旨

〈目的〉

病変部切除端々吻合が行い得ない先天性広範囲気管狭窄症に対し現在は狭窄部縦切開後に自己組織グラフト挿入する方法が施行されているが、その結果は必ずしも満足できるものではない。より有効な外科的療法を探求する目的で今回の実験を行った。

〈方法〉

- ・実験A 雑種成犬10頭使用。頸部気管前壁に短冊状の欠損部を作製しこの部に脛骨骨膜を縫着したものをI群(5頭)、これに更に肋骨による外ステントを加えたものをII群(5頭)、とし術後約10週にグラフト縮小率を調べた。
- ・実験B ビーグル犬10頭使用。頸部気管の膜様部を縫縮し、人工的に気管狭窄を作製。狭窄部の気管軟骨を縦切開し肋軟骨を縫着したものをI群(5頭)、更に外ステントで固定したものをII群(5頭)とし、術後60~70日にグラフトの変化を調べた。
- ・実験C 豚6頭を開胸し、気管を中間点で切断した。頭側及び尾側の気管の互いに相対する半周を切除後、この切除部位を側々吻合した。術後約10週で縫合部の状態を調べた。

〈結果〉

- ・実験A グラフトの縮小率はI群 $63 \pm 27\%$ 、II群 $38 \pm 8\%$ で有意差はなかった。
- ・実験B I群で死亡1例、グラフト消失2例、骨形成あるも内腔良好1例、軟骨変性あるも内腔良好1例であり、II群では死亡3例、肉芽形成・内腔狭窄1例、変性あるも内腔良好1例であった。

・実験C 術後2日で粘液栓による呼吸困難のためsacrificeした1例を除いた5例全例で極めて良好な結果が得られた。

〈考察及び結論〉

実験Aでは操作が簡単で骨形成も期待できる骨膜を使用した期待に反する結果であった。グラフトの安静を保ち骨形成の促進や縮小防止の目的で外ステントを併用したII群でも結果は同様であった。臨床例で最も多く用いられている方法である実験Bでも気道狭窄による死亡やグラフト消失などが多く又ステントとの併用は更に成績を悪化させた。実験Cの結果は極めて良好であった。グラフトを用いずに狭窄した気管を再建するために考案した術式であるが、現在端々吻合が可能と考えられる範囲の約2倍の病変にまで適応が可能である。従って側々吻合法は今後臨床的に有用な再建術式となる可能性が大きいと考える。

審 査 の 要 旨

先天性気道狭窄症は難治の疾患で現在の外科的治療成績は決して満足できるものではない。本研究ではまず従来行われている術式をモデル動物で行ってみたがその結果は満足できるものではなかった。即ちグラフトを用いる従来の術式には問題があるものと思われる。そこで新しい術式として考えたのが本研究における実験Cの側々吻合法である。本法の成績は極めて良好で、今後本術式の臨床例での成果が大いに期待される。以上より大変興味深い研究で価値の高い論文である。

よって、著者は博士（医学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。